

国語

一般選抜（2月7日実施分）

●全学部・全学科 A（前期日程）

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

ファッションという言葉は、実につかみどころがない。ファッションという名の具体的な物があるわけではないし、何かしら特定の行為を指しているわけでもない。自分の所有物をすべて目の前に並べてみて、ファッションと非ファッションに分けてみたり、一日が終わる前に、その日の行いをすべてリストアップして、ファッションと呼べるものとそうでないものに分けてみることは、とても面白い実験にはなるだろうが、ほとんど頭の体操やゲームの領域である。鳥類と哺乳類に分類するとか、食器と家具に分類するとか、職業と余暇に分類するといったことは大きく異なる。

ファッションと同じような領域で、同じように曖昧な言葉に「デザイン」があるが、デザインは、もう少しわかりやすいかもしれない。デザインは通常、「それは良いデザインである」や「デザインが悪くて怪我をした」のように、²物体の形状や姿を指す言葉として使われるか、もしくは「そのペンは、私がデザインしました」のように、物体の形状や姿を決定する行為として使われるかのどちらかである。もちろん最近では、「ライフデザイン」「キャリアデザイン」「コミュニケーション」「コミュニティデザイン」など、目に見えない趣味や計画や関係性に対しても、比喩的な意味合いを込めつつ使われることが多い。

〔中略〕

「デザイン」の語源はラテン語の designare で、それは「デザイン」と同じ語源でもあり、「計画する」という意味がある。かたや「ファッション」の語源は同じくラテン語の factio で、「完成させる」という意味がある。現在のデザインという言葉が、物ができあがる瞬間までの事前の準備や、その結果としての姿形を意味し、ファッションという言葉が、作られた衣服やアクセサリを使いこなすことや、それらを組み合わせることで見た目を形作っていくことを意味していることを考えると、デザインとファッションの語源と³現在のあり方に共通するところがあつて、非常に興味深い。つまり、物ができあがる瞬間を境界線として、その前までが「デザイン」で、その後が「ファッション」という現在使われている区分けが、「計画する」と「完成させる」というラテン語の意味と、うまく対応しているのだ。

もちろん、デザインやファッションといった言葉は、日本語と英語では⁴ビミョウに意味が異なるし、同じ日本語や英語でも一〇年二〇年経てば簡単に意味を変えてしまうだろう。日常言語としてこれだけ定着し、生活の中で生きた言葉として日々使われているものに対して、本当はこういう意味なのだと断定して使用を制限することは、ある種の学問的暴力と言える。辞書はあくまでも記録であつて、予言書ではない。語源を探って何かわかつたようになるのは、大概にした方がいだろう。むしろ、こういう言葉は、日常で使われているところを、ちょうど昆虫サイシユウでもするように捕まえて、意味を探っていくかなくてはならないものだ。そういう意味では、「悪いファッション」や「私がファッションしました」という使い方に、なぜ違和感があるのかを考えていくことは、とても重要である。

「悪いファッション」という言い方に違和感があるのは、⁶ファッションに「良し悪し」という考え方がそぐわないからであろう。流行と深く関わるファッションにおいては、価値の体系が常に入れ替わる。価値があるかどうかは、それが流行しているか、もしくはこれから流行する見込みがあるかで決定され、昨日流行の最先端だとされていたものが、簡単に今日は流行遅れとされて価値を喪失する。だが、「良い」や「悪い」という物差しは、これから先も揺るがない普遍性を指す言葉である。

かたや「私がファッションしました」という言い方に違和感があるのは、ファッションが、人々の行為が集まって引き起こされる社会現象、という意味で使われることが多いからだろう。ファッションは、無秩序な行為の集積ではなく、大勢の人々が、ある方向性に従つて行動することの結果であり、それがまた次の行為に影響を及ぼすような社会現象である。

フランスの社会学者エミール・デュルケームは、誰かに命令されているわけではないのに、私たちが社会から行動や考え方を強制されるのは、社会には「集合意識」があり、それが個人に働きかけるからだと説明している。デュルケームによれば、「同じ社会の成員たちの平均に共通な諸信念と諸感情の総体」が、「固有の生命を持つ一定の体系」として形成されたものが、集合意識である。⁷ C、同じ傾向を持った人々が集まることで、その中での平均的な思考や感覚が、個人個人の外部に、一つの意志として、生きていくかのように実体化されてしまい、それがまた個人に対して同質化を要求してくるというのだ。

社会現象としてのファッションは、まさしくその集合意識が、目に見える姿で現れたものである。「私がファッションしました」という言い方に違和感を覚えてしまうのは、ファッションが、個人の意思を超えた水準で決定されていることに、多くの人が気がついているからであろう。

ファッションのつかみどころのなさは、個人的な行為を指す言葉でありながら、一方で、流行という社会現象を示す言葉としても使われるところに⁷起因している。ファッションについて学術的な文章が書かれるようになって以来、こういった語義の曖昧さをめぐって、ファッションとは行為なのか現象なのかという議論が、常に繰り返されてきた。言い換えると、ファッションとは人間の主体的な行為を指す言葉なのか、それとも社会全体の意思を反映した現象なのか、という問いである。

ファッション研究のはじまりがどこにあるのかは諸説分かれるが、一九世紀の二人の学者、ガブリエル・タルドとギュスターヴ・ル・ボンが、その後のファッション研究の⁸イシズエを築いたとすることに對して異論は少ないだろう。この二人はかたや

問八 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号を記せ。

- ア ファッションとデザインはそれぞれ語源から現在の用法に至るまで共通した意味をもつ言葉であり、しばしば混同して使用されることが多い。
- イ 初期のファッション研究では、ファッションを個人の意志を超えた水準で生じる現象として捉える見方が優勢だった。
- ウ デュルケームの述べる「集合意識」とは、同じ傾向を持つ人々の平均的な思考や感覚が一つの意志として実体化したものであり、個人に対して同質化を強制してくる性質をもつ。
- エ 人は衣服や装飾を通して自分が何者なのかを語ろうとするが、それは単に流行現象に対する反応でしかなく、主体的な行為とはいえない。
- オ ファッションは個人的な行為を指す言葉である一方で、流行という社会現象を指す言葉としても使用される。

【二】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

たとえば以下は、あるお菓子レシピの本でマフィンの作り方の導入をする一節ですが、いかにもこやかに語りかけてくるように感じられないでしょうか。

私にとって、マフィン＝お好み焼きという感覚です。マフィンは、粉を食べるお菓子ではなく、具を食べるお菓子。中に入れるもので味が変わるので、フルーツやチーズ、チョコといった中身を楽しむもの。

マフィンの粉はあくまでも、つなぎ。例えば塩マフィンはチーズと中の具を食べるとい感じ。ホットケーキミックスマフィンも、チョコ同士をホットケーキミックスの粉でつなぐ程度なので、粉独特の味が苦手という人でも、このレシピならおいしく食べてもらええると思います。

念のために断っておくと、ニコニコしているからといって決して内容がいい加減なわけではありません。今、引用した箇所も情報はたっぷりつまっていて、**A**、といったポイントを強調しています。しかし、そんなふうな情報量もあり強調点も明確なのに、たとえば学習指導要領の文章とは対照的に、とても愛想がいいと感じられる。その秘密はどこにあるのでしょうか。上記の引用の「形」の特徴を列挙すると以下ようになります。

- 「私」という **B** が出てくる。
- ですます調を使っている。
- **C** といった体言止めが多い。
- 一つひとつの文や段落が短い。
- 「それ」などの **D** は避けられ、「マフィン」といった頻出する語も繰り返しを厭わず何度でも使われる。
- 「〜として」「〜により」などの表現による連結を避ける。
- **E** がたくさん出てくる。
- 「苦手」な人に対する配慮がある。

え、それぐらいでニコニコして感じられますか？と思う人もいるかもしれないので、ちょっと実験をしてみましょう。上記にあげたお菓子の本の「形」を使って、前章で引用した高等学校学習指導要領の文言を、多少文脈からはずれるのを承知で実験的に書き換えてみるとどうなるか試してみます。

【元】

論理国語

1 共通必修教科目により育成された資質・能力を基盤とし、主として「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考の側面の力を育成する科目として、実社会において必要となる、論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。

【書き換え版】

こんにちは。ここでは私たちが新設した論理国語という選択科目の説明をしてみましょう。まず土台となるのは、共通必修教科目のおかげで育まれた資質と能力です。その上で主に育成したいのは「思考力・判断力・表現力等」の創造的・論理的思考。このような科目を私たちが作ったのは、実社会では論理的に書いたり批判的に読んだりする資質・能力の育成が重視されるからです。論理的な思考が苦手という人も大丈夫。入りやすいように工夫を凝らしてあります。

名詞などはほとんどそのまま残しましたが、文の長さを調節したり、書き手の「顔」を出したりするだけで、ぐつと印象が変わったのがおわかりかと思えます。もちろん、F。何より、「苦手」な人にわずかでも目くばせをすると、とても親切そうに見える。

こうした例を見ると、書かれた文章でも直接話しているときと似たようなメカニズムが働くことがわかります。相手と話すときに顔が見えないと、私たちは知らず知らずのうちに緊張します。相手の顔が見えたほうが緊張感が小さくなるのです。また、相手が丁寧な口調で話すと、こちらでもリラックスできます。ただ、書き言葉の場合、「であった」という常体のほうが標準的で、ですます調になると丁寧には聞こえますが、場合によってはしつこく過剰にも感じられます。そもそも書き言葉の中に「話し言葉らしさ」を取り入れるだけで、やさしさが増して感じられるのはなぜでしょう。よく考えてみると不思議です。書き言葉に私たちが感じる「ニコニコしている」とか「愛想がある」とか「やさしそ」とはどのような心理なのでしょう。

はじめに「上機嫌」とか「ニコニコしている」という表現を持ち出したのは私なので、ここで少し整理しておきましょう。本書では第一章から文章の「構え」ということに注目しています。文章の「人柄」と言ってもいいです。「ニコニコ」という表現もその延長上です。文章が強面だとかニコニコしているといったことは、ふだんは読み手はあまり考えないかもしれませんが。お愛想とかニコニコといった概念は現実の人間関係について用いるものであり、書かれた文章はそのような反応を超えた次元にあると思われるのです。

そこには次のような前提がありそうです。すなわち、文章とはビジネスライクでまじめで実用的なもので、愛想云々などというレベルの低い感覚を超越した、大人の世界のツールなのだ、と。しかし、文章にも対人関係的な要素があると私は考えています。だからこそあえて「ニコニコしている」という表現を用いたのです。そうすることで、私たちが知らず知らずのうちに体験している、「文章中の人間関係に光をあてられるのではないか」と思うのです。

これを踏まえて、先ほどの問題に戻りましょう。文章の中にはどちらかというと「いかにも書き言葉的なもの」と「いかにも話し言葉的なもの」があり、その区別の元にはビジネスライクでまじめで大人な世界と、家庭的でリラックスしたプライベートな世界との峻別がある。整理すると以下ようになります。

- G ↑ ↓ プライベート
- まじめ・緊張 ↑ ↓ 遊び・なごみ・リラックス
- 大人・形式的 ↑ ↓ 家庭的・H
- 常体(である) ↑ ↓ 丁寧体(ですます)
- 硬い・正確・重い ↑ ↓ やわらかい・あいまい・軽い
- 書き言葉 ↑ ↓ 話し言葉

本書では今後もこの対立構図を参照します。ことばの「形」は大いにこれらの対立と関係しているからです。どんなことばと接するときにも、私たちは敏感にG / プライベート(まじめ/遊び(硬い/やわらかい))といった要素に反応します。ただ、念のため言うておくと、書き言葉の中にも「いかにも書き言葉的な書き言葉」と、「いかにも話し言葉的な書き言葉」があります。これは本をただせば「I」などないということ、つまり、どんな書き言葉も「風」を演出しているにすぎないということを示唆しそうです。文章というものは、はじめから書かれ方が必然的に決まっているわけではなく、書き手の思惑や読み手の期待などがあって、それに合致するように態度や人柄が演出されるだけだ、と。だから、文章の「形」を見ることで、その書き手が——どのような理念を掲げていても——実際にはどのような態度を見せようとしているか、そのことを通してどのような効果を狙っているかが見えてきます。

(阿部公彦『文章は「形」から読む ことばの魔術と出会うために』による)

問一 空白部Aに入る適切な文の中から選び、記号を記せ。

- ア マフィンはお好み焼きとは異なり、中に入れる具が大事だ
- イ マフィンの中に入れる具が大事だ、粉はつなぎだ
- ウ マフィンは具ではなく、粉を食べるお菓子だ
- エ マフィンは中に入れる具が大事だ、お好み焼きのような食事だ

問二 空白部Bに入る適切な語を次の中から選び、記号を記せ。

- ア 一人称
- イ 二人称
- ウ 三人称

問三 空白部Cには引用文から具体例が全て抜き出されている。その数として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 一つ
- イ 二つ
- ウ 三つ
- エ 四つ

問四 空白部Dに入る適切な語を次の中から選び、記号を記せ。

- ア 間投詞
- イ 接続詞
- ウ 代名詞
- エ 連体詞

問五 空白部Eに入る適当な語句を次の中から選び、記号を記せ。

- ア 抽象語より具体的な動詞
- イ 抽象語より具体的な名詞
- ウ 具体語より抽象的な動詞
- エ 具体語より抽象的な名詞

問六 傍線部1の文の特徴として適当でないものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 接続詞を用いて文をつないでいる。
- イ 「一的」という語を多用している。
- ウ 途中で切れることなく一文が長い。
- エ 類似した語句を並列的に挙げている。

問七 空白部Fに入る適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア ますます調の効果は大きいし、具体的な名詞の使用もそれなりの働きを持ちます
- イ である調の効果は大きいし、具体的な名詞の使用もそれなりの働きを持ちます
- ウ ますます調の効果は大きいし、体言止めもそれなりの働きを持ちます
- エ である調の効果は大きいし、体言止めもそれなりの働きを持ちます

問八 傍線部2の内容として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 書かれた文章であっても、書き手の個人的な「顔」が見えるような文章にすることで、緊張感が少なくなり身近に感じられるということ
- イ 書かれた文章であっても、常体にすることで丁寧に聞こえ、より好印象を与えることができるということ
- ウ 書かれた文章であっても、書き手の個人的な「顔」が見えるようにすると、しつこく過剰な印象を与えることもあるということ
- エ 書かれた文章であっても、ますます調を取り入れることによって相手の「顔」が見えやすくなるということ

問九 傍線部3について著者はどう考えているか。適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア お愛想とかニコニコといった概念は現実の人間関係について用いるものであり、書かれた文章はそのような反応を超えた次元にある。
- イ 文章とはビジネスライクでまじめで実用的なもので、愛想云々などというレベルの低い感覚を超越した、大人の世界のツールである。
- ウ ふだんは読み手はあまり考えないが、文章にも強面だとかニコニコしているといった、対人関係的な要素がある。
- エ 文章中の人間関係にはビジネスライクでまじめで大人な世界と、家庭的でリラックスしたプライベートな世界とが混在している。

問十 空白部G・Hに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

- ア パブリック イ パーソナル ウ カジュアル エ シビア オ クリティカル

問十一 空白部Iに入る適当な語句を次の中から選び、記号を記せ。

- ア 絶対的な話し言葉
- イ 絶対的な書き言葉
- ウ 書き言葉的な話し言葉
- エ 話し言葉的な話し言葉

問十二 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号を記せ。

- ア お菓子のレシピ本でマフィンの作り方の導入をする一節を引用しているが、愛想のよさそうな文章である反面、内容はいい加減なところがある。
- イ 高等学校学習指導要領の元の文言は、「くにより」「くとして」などの表現による連結を好んで用いている。
- ウ 愛想とかニコニコといった概念は話しことばについて用いるものであり、書かれた文章はそのような反応を超えた次元で考える必要がある。

エ 文章には「書き言葉的」と「話し言葉的」の区別があり、その元には落ち着いて余裕のある大人な世界と、家庭的でリラックスしたプライベートな世界との区別がある。

オ 我々は文章に対して、「硬い／やわらかい」といった要素に反応するが、書き言葉の中にも「いかにも書き言葉的な書き言葉」と、「いかにも話し言葉的な書き言葉」がある。

三 傍線部 1・2・3・4・5 にあたる漢字を含むものを下のア～エから選び、記号を記せ。

一 病がカイ癒した。

ア 事態が思わぬ方向にテンカイした。
イ カイジョウしないとドアを開けられない。
ウ カイメイ屈を出さなければならぬ。
エ カイソク列車はこの駅には止まらない。

二 往時のイ容を伝えている。

ア ケンイ主義的な対応をされた。
イ イヨウなできごとに驚かされた。
ウ 意見のソウイで事が前進しない。
エ あの人は私のイユウと言ってよい。

三 榮譽にヨクする。

ア ヨクヤに入植する。
イ 父はシベリアでヨクリユウ生活をおくった。
ウ シンリンヨクが流行している。
エ セイフクヨクを発揮する。

四 軍に邸を接シユウされた。

ア 芝居のシユウタンバに涙が出た。
イ コウシユウ電話が減りつつある。
ウ 当主がセシユウで入れ替わる。
エ シユウニユウが激減した。

五 一念ホツ起して新しい趣味を始めた。

ア あそこはホツケ宗の寺だ。
イ 学業の成就をホツする。
ウ ホツクの会を開いた。
エ 仏具屋にホツスを買に行き。

国語

一般選抜（2月8日実施分）

●全学部・全学科 B（前期日程）

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

雨森芳洲（一六六八～一七五五）は、対馬藩にあって対朝鮮外交を長く担当した儒者として、また朝鮮語、中国語に通じた語学者として、当時名を知られていた。

日本人の海外渡航が厳しく制限されていた時代に、芳洲は唯一の常設在外公館であった釜山の倭館に再三滞在し、朝鮮の人々の生活に親しく接し、朝鮮語を学び、その語学力をもって、かの地の人々と深く交わった。このような海外生活の経験は、江戸時代の知識人としてはまったく稀有のものであった。

彼はまた対馬藩の朝鮮方として、朝鮮との外交折衝を行ない、両国の慣習、法制、文化の相違からくるものごとに、常に身をさらしていた。このような「国際状況」にいつも身を置いているということが、彼に **A** 他の日本人とは異なった学問観、世界観をいだかせるにいたる。

まず第一に語学者として、芳洲は組織だった朝鮮語の教科書を作成し、朝鮮語通訳の養成のための学校や教育体系をつくった。彼は通訳に対して公務員としての自覚を求め、通訳が単なる言葉の技術者に終わることなく、学問、教養を備え、相手国の事情、慣例に通ずることを必須とした。（一）

それまでは実務の経験を通じてのみ学ばれるだけであった朝鮮語、および朝鮮事情は、こうして芳洲によって体系的な学問として把握される。芳洲の業績としてまず第一に指をクツすべきは、このような学問的な朝鮮研究を組織づけたことである。芳洲の編んだ朝鮮語教科書『交隣須知』は、幾度も改訂を経ながら、明治時代にいたるまで朝鮮語教科書として使用され続けた。

第二に、彼は外交担当者としての実務の体験を通じて、相手国の風俗、習慣、言語、文化に精通し、相手の事情と心情を理解することが国際関係を円滑に進ませる要諦である、という外交思想を生み出していた。自己の主張を通すために、武力や威圧に性急に訴えるのではなく、故事、先例を重んじながら、粘り強く「理」によって説得を行なうのでなければならぬとした。

芳洲の外交思想は、韓国との平等、対等の関係をその前提としたものであった。彼は、力の関係いかんで相手を屈服させ、朝貢を行なわせるような外交をよしとしなかった。相互の主権を尊重し、その平等を原則とする、近代的な国際関係の基本に通ずるような外交のあり方を提示している。

日本は中国と文化上、貿易上の交流は長く行なったが、国家利益の衝突を調整するような意味での外交関係を持った時期は、あまり長くなかった。したがって、朝鮮との関係こそ、国家と国家の利害、主張がまともにもぶつかり合う唯一の国交、外交の場であったといつてよい。その外交実務の渦中にあった芳洲は、個々の文化を歴史の中ではくみ、独自の慣習、法体系を持つにいたった各国が、平等の権利をもって相手を尊重しつつ交際を行なう国際関係のあり方を、対朝鮮外交という具体例によって説き明かしている。明治にいたるまでの思想史を通じて、数少ない日本の外交思想、国際関係の思想の代表として、芳洲の著作、特に『交隣提綱』は「フキユウ」の価値を有する。

第三に、芳洲の各国、各民族の平等を強調する思想は、その各民族の言語、文化の本質をどうとらえるか、という設問に直結している。

中国語、韓国語を深く学んだ芳洲は、たとえ構造の異なる言語であっても、コミュニケーションの手段としての価値は等しい、という結論に達していた。日本語と中国語では、動詞と目的語の語順が反対であるけれども、その語が形をなし、発話される以前の状態を想定すれば、日本語も中国語も同じである、と彼はいう。あたかも「オムスキー」の「変形生成文法」の原型にあたるような考えを、二五〇年も前に芳洲はさらりと語っている。

また各言語を表記する文字についても、芳洲はそれぞれの文字がその言語を表記する手段として最適なのだとして、儒者たちに見られる漢字の優越論をしりぞけている。朝鮮の知識人が卑しいものとしていたハンゲルにも彼はその意義を認め、進んでこれを学んでいる。

各文化の平等を説く芳洲の思想が、このように彼が中国や朝鮮の文化を深く学び、その学習体験の中から生まれてきた実感として語られているところに、独自の価値がある。

一方、芳洲の各民族の平等を説く思想は、西洋の十八世紀の人道主義に通ずるものを持つている。芳洲は民族、宗教、言語といった国と国を分つものに絶対的な価値を付与せず、普遍的な人間性という尺度によって、各民族の価値を評定しようとする。国の尊いと卑しいとは、君子と小人の数の多い少ないによる、と芳洲はいう。

ヨーロッパの思想界がキリスト教至上主義からぬけ出して、各民族、各宗教の平等を説きはじめるのは十八世紀の後半であり、ヴォルテールの『寛容論』（一七六三）がその代表である。ここではじめて、キリスト教徒である以上に人間であることの方が本質的である、という原則が提出される。

（二） 芳洲の思想は、十八世紀のヨーロッパの思想家が持ったような世界全体を見晴らす視野の広大さがなく、カントの国際関係の思想にみられるような「国際連合」を基礎づける体系性をも欠いている。しかし、他民族を蔑視する心理を精密に分析し、**B** 文化上、慣習上の相違が、偏見と感情の行き違いを生み出し、民族間の不和、紛争を引き起こしていることを明らかにする芳洲の「文化摩擦」の観察は、独自の意義と価値を持っている。日本人が朝鮮人に対していだく偏見に根拠のないことを解明してみせる芳洲の論法は、現代世界にもはびこる人種的偏見の分析にも適用しうるものだろう。

このように、芳洲の国際関係観、比較文化論は、偏見からの自由さ、自己の文化の相対化という点で際立っている。朱子学

注⁴

朱子学

問七 空白部C・Dに入る語の組み合わせとして適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 合理——不可能
- イ 人道——困難
- ウ 原理——安泰
- エ 相對——必然
- オ 修正——朝飯前

問八 傍線部10の意味として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 食べたり飲んだりせずにひたすら勉強しつづけた。
- イ 勉強のスピードが遅かった。
- ウ 様々なことがらを同時に勉強した。
- エ 途中で諦めるのではなく、根気強くずっと勉強した。

問九 次の文が入る適当な箇所を(Ⅰ)～(Ⅳ)から選び、番号を記せ。

時期からいうなら、むしろ芳洲の方が早いといえる。

問十 本文の内容と合うものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 雨森芳洲はキリスト教の影響から脱して人道主義的な外交を行った。
- イ 雨森芳洲は江戸時代に対馬藩と中国の間の外交を担当した。
- ウ 雨森芳洲は日本の古代文化の優越性を主張したため次第に忘れられていった。
- エ 雨森芳洲は外国語と外国の文化を粘り強く学び、柔軟で広い視野を持っていた。
- オ 雨森芳洲は相互の主権を尊重し、平等を原則としたため、外交において相手国との摩擦を経験せずに済んだ。

(二) 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

日露戦争の時期には一時的に閲覧者の数も減少した^注帝国図書館だが、講和後は再び利用増に転じた。新館が完成した一九〇六(明治三九)年度は、一九万五三四四人の利用があり、前年の二二万三四九人と比べて七万人以上、前々年の一三万三八二九人と比較しても六万人以上の増加であった(前年度の利用者がやや少ないのは新館移転のための休館も影響している)。

帝国図書館新館開館からほどなく、姫路から第一高等学校入学準備のため上京した和辻哲郎^{ちつじつろ}は、帝国図書館の建物を「鮮やかな印象の残っている」もの一つに挙げていた。彼は図書館で英国の一九世紀の詩人の作を次々と借りて、A というよりページを眺めてB という。地方から上京した少年にとっては、上野の帝国図書館は「それまでの数年の間見たいと思っていたいろいろの書物」を借りられる場であった。

わたくしに最も強い印象を残したのは、閲覧室の内部の姿であった。天井が非常に高く、従って東側と西側の壁に並んでいる窓も非常に細長く高くのびて居り、床の上に並んでいる閲覧机がいかにも下の方に、低いところにあるという感じになっていた。室の北端の一段高いところの机に控えている司書の人も、やはり同じように低いところにいるという感じで、天井の高さを反映していた。わたくしは机の上に開いた書物から眼を離して、時々天井を仰ぎ、そこにぶら下っているシャンドンリヤを眺めた。こんなに高い天井の下に坐るのは生れて始めてだとしみじみ思った。そうして何ともいえない幸福な気持ちになった(和辻哲郎『自叙伝の試み』)。

半世紀以上経ってからの回顧なので、美化やC はあるかもしれない。和辻が座ったのは三階の普通閲覧室であろう。和辻は同じ回想で、英書が読みたければ丸善に行った方がよいのだが、田舎から出て来たばかりの貧乏書生には「一寸近づきにくいところ」だったとも述べている。帝国図書館が学生生徒の人気を集めた理由の一端を垣間見る思いがする。

(中略)

帝国図書館にはマナーの悪い不届きな利用者もいたようである。新館移転後、故意に書籍を毀損する者や、カード目録に悪戯をして汚す者、勝手に心棒を動かしてカードを抜き取る者、壁に落書きする者まで見られた。D 帝国図書館側は一九〇六年五月、万一このような行為に及ぶ者がいたら係員に「密告」すること、密告者に対しては「相当ノ謝儀」を与えるという掲示を出した。帝国図書館内には巡視があり、居眠りや私語などを厳しく注意して回っていた(西村正守「上野図書館掲示板今昔記その二」)。

現存する帝国図書館文書中に見られる利用統計に書かれた「閲覧ノ事故表」なる史料がある。それによれば、一カ月の間で、尋常閲覧証を紛失した者が三人、特別閲覧証を紛失した者が一人、他人の閲覧証を盗んで退館した者が一人、他人の二〇回券を使用するため偽名入館を試みた者が二名、借り受け中の図書に落書きをした者が二人、偽名ないし不都合な行為により登館を禁止

した者が一人いたと記録されている。E 巡視が巡回中に注意をした記録として、閲覧席での睡眠が三六一件、閲覧室内でのおしゃべりが三〇二件、閲覧席のことで不都合があった者四七件、閲覧室内で不体裁の行為に及んだもの二〇件、運動場の掲示に違反したもの一七七件、その他雑件を含めて九一件、一日平均で三一件の口頭での注意が行われていた。F、それでも目の届かない場所で建物や蔵書を汚損するものが後を絶たなかったのであろう。

図書館側で取り締まりを強化するにしても、閲覧証に記入する氏名や所属を偽る者を完全に防ぐことは難しかったようである。帝国図書館が学生生徒に対して自然主義文学などの恋愛小説作品の貸出に制限を加えた際、学生は身分を偽って「雑誌記者」や「著述家」と身分を詐称し、禁じられた書籍を読むという対抗措置を取っていたと新聞が報じている(恋愛小説渴望者の狡策)『読売新聞』一九〇七年六月一八日)。

図書への書き込みや居眠り、私語を厳しく取り締まる帝国図書館の雰囲気は、G もものではなかった。

出納台が閲覧席より一段高いところに置かれたことで、利用者は常にH の対象となる。このことに注目して、帝国図書館の閲覧室を日露戦争後の一等国民にふさわしい文明人となるための規律・訓練を要求する場として評価する研究もある(高梨章「俯瞰する出納台」)。先に引用した『自叙伝の試み』でも、「室の北端の一段高いところの机に控えている司書の人」と書いているように、和辻はこの構造に気づいていたが、もっと敏感だったのは芥川龍之介である。芥川の自伝的小説とされる「大導師信輔の半生」に登場する「帝国図書館の与えた第一の感銘」とは、高い天井、大きい窓、無数の椅子を埋め尽くす無数の人々に対する「I」であった。

帝国図書館の役所風の接遇を意地悪く、冷たく感じたとする新聞投書類は枚挙にいとまがないほどである。出納台には黒い事務服を着用した受付がいて、あたりを睥睨しながら閲覧者を呼ぶ。利用者は見降ろされながら本を受け取る。「私は時々上野の帝国図書館へ参りますが、いつも感ずるのは、いかにも館内に和気が無くJ 空気が満ちて居ることです、図書館の窮屈は中々取れそうにもありません、否、益々ひどくなるようで、館員と閲覧人とは官吏に対する人民と云うよりは、寧ろ看守と罪人のような傾があります」(「図書館と和気」『都新聞』一九〇七年七月二三日)。さながら閲覧室は監獄じみてくる。

明治末から大正初期にかけて、お茶の水高等女学校の生徒として帝国図書館に通った作家の宮本(中条百合子)は、「上野の図書館は決して愉快なところでもなければ、図書館として充分利用出来る便利な処でもなかった」といい、その雰囲気は「役所くさい、うるおいのない調子だけで親しみ難かった」。出納台に至っては、「あんなに高い、絵にある閻魔の大机のようななどは寧ろK 滑稽だ」と語る(宮本百合子「蠹魚」)。何度か利用するなかで違和感がうすれていく利用者もいただろうが、それは居眠りや私語、閲覧室内の飲食、持参品のインキ壺、閲覧証の記入方法に至るまで微細に注がれる管理の視線を受け入れたともいえる。

L それは、利用者が常に従順だったことを意味しない。M 当時の帝国図書館内の落書きを書き留めた随筆によると、地下室食堂の壁には、「下足の老父今少し丁寧にす可し(但し一銭やればおせじを云う)而し気の毒な者なり」(売店の菓子店に言う菓子安く売れ十七八年の女を入れるろ)などというのがあり、さらに館外玄関の正面板は、満員で待ちぼうけを食った利用者が「自暴自棄半分に」大量の落書きを残していたという。曰く「図書館は勉強家の来る所に非ず」「亡国の気象を図書館養生し」「三十人待つのに三時間かかった」「待つ人の心も知らぬ鹿鹿俗吏」「立ん坊養生所」「満員で待つて居る時は館員どもをぶんなぐってやりたい」「駄小説などと首引して貴重な時間を徒費している青年は早く出る」「こんなにもたまた図書館があるか」「気長の養生所」「速に増室を望む」等々(鶴の目鷹の目生「落書の東京」)、図書館への憤懣が綴られている。落書きをそのまま利用者の「生の声」と解釈するのは一面的だが、帝国図書館文書の『閲覧室掲示其他閲覧室に関する事項』に綴じられた注意喚起の掲示を見る限り、一向にマナーが改善された形跡がない。食堂備え付けの新聞紙や灰皿を暖炉に投入するとか、ゴミを屑籠に捨てないとか、持参した弁当を無断で備え付けのストーブに置いて温め異臭騒ぎを起こすとか、帝国図書館は結局のところ始終このようなN 利用者を抱え込んだのであり、監視の視線と利用者の要求は絶えずせめぎあっていたといえよう。

(長尾宗典『帝国図書館——近代日本の「知」の物語』による)

注 帝国図書館……一八九七(明治三〇)年に設立され、文部大臣の管理の下で運営された国立図書館。一九四七年に国立図書館と改称し、一九四九年には、新たに国会に設置された国立国会図書館に統合されてその役割を終えた。

問一 空白部A・Bに入る語句の組み合わせとして適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 写し取る——茫然としていた
イ 楽しむ——読んでいた
ウ 黙読する——音読した
エ 読む——楽しんでた

問二 空白部Cに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

- ア 自嘲
イ 過信
ウ 欠落
エ 誇張

問三 傍線部1について、

- ① 読みを記せ。
② 意味として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。
ア 無理をして覗く
イ ちらりと見て取る
ウ 偏った見方でとらえる
エ 根底まで見透かす

問四 傍線部2について、

① 読みを記せ。

② 意味として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 範囲を限って眺める イ きよろきよろ見回す ウ きびしく直視する エ 威圧的な態度でにらむ

問五 空白部D・E・F・L・Mに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ(同じ記号を複数回用いてよい)。

ア しかし イ たとえば ウ そこで エ さらに

問六 空白部G・J・K・Nに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア したたかな イ 冷やかな ウ おだやかな エ 愉快な

問七 空白部Hに入る適当な語を本文の最後の段落から抜き出して記せ。

問八 空白部Iに入る語句として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 羨望 イ 嫉妬 ウ 恐怖 エ 羞恥

〔三〕 傍線部1・2・3・4・5にあたる漢字を含むものを下のア～エから選び、記号を記せ。

一 権力を得るためにカク策する。

ア 独自のシステムをカクリツする。
イ 五輪で金メダルをカクトクする。
ウ 電車でカンカクをあげて座る。
エ 日本の義務教育はカクイツテキだ。

二 最新の技術を会トクする。

ア 新聞社にトクメイで投書をする。
イ 利害トクシツを考える。
ウ 彼はトクジツな人柄だ。
エ 彼の作風はかなりトクシユだ。

三 答案をテン削する。

ア 妹の入院に付きソウ。
イ 従来の方針をテンカンする。
ウ 鳥は昆虫のテンテキだ。
エ 線路にソった道を歩く。

四 人混みの間ゲキを縫って進む。

ア お芝居を観にゲキジョウに行く。
イ 雲のスキマから太陽が覗く。
ウ 偉人の生き方にシゲキを受ける。
エ この建物はスキヤ造りだ。

五 自由をカツ望する。

ア 彼はとてもカツドウ的だ。
イ 自由カツタツに意見を述べる。
ウ 試合の敗因をソウカツする。
エ 用意していた資金がコカツした。

国語

●全学部・全学科C（前期日程）

一般選抜（2月9日実施分）

【一】次の文章は、「新しい元号が令和」になりましたが、日本の元号に言葉の規則性はありますかという質問に対する窪園晴夫氏の回答である。これを読み、後の問いに答えよ。

2019年4月1日に新しい元号「令和（Reiwa）」が発表されました。「令和」ははじめて漢籍ではなく国書¹今回は『マンヨウシュウ』から選ばれたということで、新聞等では「元号1300年のテンカン」などと話題になっていましたが、言葉のリズム（韻律）という点から見ると、これまでの伝統からはずれるものではありません。むしろ言語学的には予想通りの元号であり、これまでの元号と同じようにリズムカルな構造を有しています。

元号のリズムを理解するためには、漢語の構造を理解する必要があります。元号は基本的に漢字2文字で、**A** ではなく**B** です。たとえば「明治」「昭和」は「あきはる」「あきかず」ではなく「メイジ」「シヨウワ」となります。

B の漢字には昭和の「昭」のように2拍の長さのものと、「和」のように1拍のものしかありません。2字漢語となると、2拍+2拍、2拍+1拍、1拍+2拍、1拍+1拍の4種類しか組み合わせができませんが、過去の日本の元号は、この点において大きな偏りを示しています。

250近い元号を調べてみると、その約7割が2+2（長長）の構造のもので、それに続くのが2+1（長短）の2割強です。これに対し、1+2（短長）の元号（たとえば同や治承）は全体の7%しかなく、1+1（短短）に至っては皆無です。

さらに詳しく調べてみると、2+2の元号の大半が、慶応、大正、平成のように（強弱強弱）（○○○○）のリズムを持つものです（弱の部分）**C**（一）や**D**（へ）、**E**（こ）、二重母音後半（い）のような語頭に立ちえない音、すなわち言語学で特殊拍と呼ばれる弱い音です。

また2+1の元号のほとんどが、明治や昭和のように（強弱強）（○○○）という構造を持つものです。

つまり、過去の元号は**F** 。

G 過去の元号は初めから構造的な偏りを示しています。2+2が多いのは、音読み漢字の多くが1文字2拍であることによるもので、特に不思議な偏りではありません。つまり「和」のような1拍の漢字より「昭」のような2拍の漢字の方がはるかに多いのです。たとえば「国立国語研究所」という音読みの名前では、「**H**」の5つが2拍で、「**I**」の2つが1拍です。（Ⅰ）

注目すべきは長短（2+1）と短長（1+2）の差です。明治や昭和のような長短の元号があれば、治明や和昭のように短長の元号も同数あつておかしくないのですが、実際には両者の間に3倍強の開きがあります。

全体として2+2と2+1を好み、とりわけ（強弱強弱）と（強弱強）の2つのリズムを好むというのが、日本の元号の大きな特徴として浮かび上がります。

今回最終選考に残った6つの候補を見ても、令和、万和、^{ばな}広至、^{ひろ}久化の4つが（強弱強）の長短リズム、^{えい}英弘と^{たけ}万保の2つが（強弱強弱）の長長リズムであり、（強弱弱）つまり1+2の短長リズムや（強強）（1+1）の短短リズムのものは皆無でした。

元号のもう一つの特徴は、過去160年間、上記の2種類の元号の現れ方に規則性が見出されるという事実です。文久（1861〜64年）から元治、慶応、明治、大正、昭和、平成と続く中で、長長（文久、**J**）と長短（**K**）の元号が、交互に選ばれています。（Ⅱ）

この流れで行くと、平成に続く元号は、明治や昭和と同じ長短（強弱強）という構造を持つことが予想されました。「令和」はまさにこの予想通りの元号です。

ところで、（強弱強弱）の長長構造と（強弱強）の長短構造を好むのは、元号だけではなく、日本語の一般的な特徴です。

L、赤ちゃん言葉はマンマ、オンブ、ダッコ、クック、バーバ、ジージのような長短（強弱強）の語と、ポンポンやプーピー、ハイハイ、ナイナイのような長長（強弱強弱）の語に二分されます。（強弱強）は出てきても、（強強弱）は出てこないのが赤ちゃん言葉の際立った特徴です。たとえば赤ちゃん言葉にバーバはありますが、ババーはありません。（Ⅲ）

また発音の変化を見ても、詩歌（しいかや富貴（ふうき）、三つ（みつ）つ、四つ（よっ）つ）などは母音を伸ばしたり**E**（こ）を入れたりして、短短（強強）の構造から長短（強弱強）の構造を作り出しています。

漫画『ドラゴンボール』で、魔人ブウの生まれ変わりがウブではなくウーブと呼ばれるのも同じ現象です。野球の声援でも、阿部のような2拍の名前は、「かっ」とばせえあべーではなく「あーべ」と前の母音を長くして長短（強弱強）の構造が作り出されます。

M、女王の発音がジョオーからジョーオーへ変化しつつあるのは短長（強強弱）から長長（強弱強弱）への変化です。（強弱強弱）のリズムも日本語では好まれており、たとえばピコ太郎の「P P A P」（ペンバイナッポーアッポーペン）は、見事なまでに（強弱）の連続です。（Ⅳ）

このように、日本語にはいたるところに（強強弱）を避けて、（強弱強）や（強弱強弱）を作り出す力が働いています。

このように見てみると、長短(強弱強)という構造を持つ「令和」は、これまでの元号の歴史と構造にも、また日本語のリズムにもとてもうまく合致していることがわかります。(V)

日本固有の文化を尊重するというのであれば、同じ漢字2文字でも、思い切って中国語の発音に基づいた音読みだけでなく、日本語独自の読み方(訓読み、和語読み)をモザイクするのかもしれない道かもしれません。たとえば「大和」という漢字をヤマトと和語読みすると、これまでの音読みの元号とは一味違った新鮮な響き——短短短(強強強)のリズム——が出てきます。

(国立国語研究所編『日本語の大疑問 眠れなくなるほど面白い ことばの世界』による)

注 2 拍…: 拗音は前の字と合わせて2文字で1拍となる。たとえば「昭」は、「しよ」と「う」の2拍。

問一 傍線部1・2・4を漢字に改め、3の読みを記せ。

問二 空白部A・Bに入る適切な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 重箱読み イ 音読み ウ 湯桶読み エ 訓読み

問三 空白部C・D・Eに入る適切な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 撥音 イ 擬音 ウ 長音 エ 子音 オ 促音

問四 空白部Fに入る適切なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 2+1と1+2の2種類で全体の過半数を占め、その多くが(強弱強弱)か(強弱強)というリズムを持っています

イ 2+1と2+2の2種類で全体の9割強を占め、その大半が(弱強弱強)というリズムを持っています

ウ 2+2と1+1の2種類で全体の8割強を占め、その大半が(強弱強弱)か(強弱強)というリズムを持っています

エ 2+2と2+1の2種類で全体の9割強を占めるが、(強弱強弱)というリズムを持つものはわずかです

オ 2+2と2+1の2種類で全体の9割強を占め、その大半が(強弱強弱)か(強弱強)というリズムを持っています

問五 空白部G・L・Mに入る適切な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア たとえば イ このように ウ 一方

問六 空白部H・Iに入る語の順序として適切なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 国、立、国、語、研——究、所

イ 国、立、国、語、所——研、究

ウ 国、立、国、研、究——語、所

エ 国、立、国、研、所——語、究

オ 立、語、研、究、所——国、国

問七 空白部J・Kに入る語の順序として適切なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 元治、明治、昭和——慶応、大正、平成

イ 慶応、大正、平成——元治、明治、昭和

ウ 慶応、明治、平成——元治、大正、昭和

エ 慶応、大正、平成——元治、明治、令和

問八 次の文が入る適切な箇所を(Ⅰ)～(Ⅴ)から選び、番号を記せ。

マスコミでは漢籍ではなく国書に由来するという点が、ことのほか強調されてきましたが、言語学的に見ると新元号はこれまでの伝統を忠実に守っており、日本語が好むリズム構造と一致しているのです。

問九 本文の内容と合うものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 「令和」が話題となっていたのは漢籍ではなく国書から選ばれたという点であったが、言語学的に見ると、これまでの伝統に則っていない点についても注目される。

イ 「昭和」や「令和」のような長短の元号と、短長の元号は、ほぼ同数である。

ウ 「令和」は、これまでの元号の歴史と構造にも、また日本語のリズムにもとてもうまく合致している。

エ 2拍の名を持つ人物へ声援を送る際に、「強弱強」の構造が作られるのは、『ドラゴンボール』において魔人ブウの生まれ変わりの名がもとのものから逆転して「ウブ」となるのと同じ現象である。

(二) 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

結論からいえば、近世でも暴力の集権化は行われており、幕府・藩の武士身分が暴力の正当性を独占していた。そのことを、豊臣秀吉の「刀狩り・「喧嘩停止令」に焦点を当てて見ていきたい。

刀狩りと聞くと、百姓を丸腰にしたイメージを持つが、文字どおりの武装解除ではなかった。そもそも中世では農村部でも男性は成人とともに刀を所有した。刀以外にも、弓や鎗、鉄砲などを、鳥獣の駆除や、村の治安維持、縄張り争いなどの際に用いていた(藤木久志『刀狩り』)。

刀狩りは名目上、武器の没収を表明したものの、実際には、村々に多くの刀や鉄砲が残された。A 刀狩りの重点は、すべての武器を百姓から没収することよりも、兵農分離のために、百姓の帯刀権や村の武装権を規制し、それらを武士の特権と

することに置かれていたからである。B、村で日常的に使用する小さな刀や、鉄砲・鎗などがすべて没収されることはなかった。

刀狩りと並行して、秀吉は村々の武力抗争を規制した。用水の使用などをめぐって村々の争いが起きたが、その際、弓や鎗を持ち出して、馬に乗るような、まさに合戦が繰り広げられた。秀吉の時代には、こうした村の武力紛争を違法とし、代表者を処刑する判例が多く出された。一連の判例は一般に「喧嘩停止令」と呼ばれる。刀狩りと「喧嘩停止令」によって、村々には多くの武器が残ったものの、それらを紛争に使用することは禁じられたのである。(1)

江戸時代には、この「喧嘩停止令」が法として継承され、百姓身分の武力紛争は禁じられた。しかし、秀吉の時代と同様に、武器となる物を所持するだけではお咎めは受けなかった。一七世紀末には、村々が農具として所持する鉄砲は、尾張藩で約一六〇〇挺、松本藩で約五〇〇挺、紀州藩で約三〇〇〇挺など、驚くべき数にのぼる(塚本学『生類をめぐる政治』)。これらは田畑を荒らす鳥獣の駆除などに使われていた。これらを武器として争いに用いることは固く禁じられたが、所持は当然のことと見なされていたという。

ただし、³身分を象徴する刀については、一定の規制が加えられた。脇差のような小さな刀は問題ないが、長い柄を持つものや鞘が派手なものを、町人・百姓が所持することは規制された。外見上、武士との身分差があまりいなくなるためである。規制はあくまで、百姓に武器を持たせないためではなく、外見的に身分を明確にするためであった(藤木『刀狩り』)。

このようにして、軍役を負う武士と年貢・夫役を負う百姓の身分が固定化された。実際には脇差し・鎗・鉄砲など武器となるものを持っていても、人に向けては使ってはならない。これが百姓身分であった。領主に対して異議申し立てをする百姓一揆は、Cによって、百姓の暴力を制御するこのシステムに規定されていた。

百姓一揆というと、竹槍や⁴席旗を持った農民が領主や村役人といった政治・社会の権力者と対決したようなイメージがある。D、江戸時代の百姓一揆には一定の作法があり、竹槍などの武器を持ち出すことはほとんどなかった。(II) まずは、合法的な領主権力への申し立てである訴願について確認しておきたい。訴願とは、年貢・役の軽減などを村役人が領主に文書で願ひ訴えることである。これは合法的な行為と見なされ、罰せられることはなかった。だが訴願の内容が認められなかった場合、百姓は非合法の行為に出て、訴願の実行を領主に求めることがあった。それが百姓一揆である。

何を百姓一揆と見なすかは諸説あるが、近世史研究者の保坂智は、⁵徒党・強訴・逃散の三種類で説明している(『百姓一揆と義民の研究』)。徒党は一揆集団の結成を指す。具体的には、目的や禁止事項などを記した起請文・一揆契状を作り、神水を回し飲むことで集団が結成された。強訴は百姓が集団となって城下などに押しかけて訴願内容の実行を求めることをいう。逃散はまさに字の如く、年貢・夫役といった百姓の務めを放棄して逃げてしまうことである。

徒党・強訴・逃散はいずれも非合法とされる行為であり、主だった者は裁かれた。このほか、合法的な訴願と非合法の徒党・強訴・逃散との間に位置する行為として、越訴があった。本来訴えるべき役人(役所)を飛び越して、より上級の役人(役所)に訴願することである。

このように、百姓一揆とは権力者と対抗するためにやみくもに暴力をふるうものではなく、訴願の要求内容を聞き入れられるように行うものであった。そこには⁴一定の作法と呼ぶべき慣習があった。

一揆集団が結成される際に作成された連判状(一揆契状)には、一揆の目的、経費の調達に関する条目のほか、規律を維持するために、飲酒の禁止、放火・盗みの禁止、蓑笠の着用などの行動統制に関わる条目が含まれていた。一揆にふみきつた際の百姓の出で立ちや行動は、掟で定められていたのである(保坂智『百姓一揆とその作法』)。百姓一揆で、特にタブーとされた行為の一つは放火だった。実際に、一七〜一八世紀に起きた百姓一揆の記録を見ると、放火が行われたのは二件のみであったという(須田努『悪党の一九世紀』)。

一揆について領内の各地に知らせる際には、一揆の目的や集合する日時、参加しない場合の制裁方法などを記した廻状が作られた。都市における打ちこわしの場合、張札が用いられることが多かった。動員の対象となるのは原則として男性であり、女性に加わることは少なかった。米騒動や女性の労働に関わる問題で強訴する場合には、女性が加わったが、打ちこわしなどの暴力行使が始まると、後景に退いたという(保坂智『百姓一揆と義民の研究』)。(III)

強訴の開始は、かがり火を焚いたり、法螺貝を吹いたり、半鐘を鳴らしたりして、合図した。視覚・聴覚をとおして、日常とは異なる行動が始まったことを知らせたのである。強訴の際に一揆勢が持ち出したのは、鎌や鍬・鋤などの農具であり、鉄砲や刀剣などの武器ではなかった。加えて、農作業と同じ蓑笠を着用するのが一般的だった。

なぜ百姓一揆では武器を持ち出さなかったのだろうか。先述のとおり、農村でも刀や鉄砲を所有している家は多かった。実際に、強訴の際に鉄砲が持ち出されることもあった。しかし武器として使用されたわけではなく、合図するための鳴り物として用いられた。

E⁵、百姓は武器となり得る物を所有していながら、意図的に用いなかったのである。領主権力に武力で対抗する気はなかったことになる。幕府や藩も、一揆をいきなり弾圧することはなく、役人が訴状を受け取って、説諭し解散させるケースが

問九 傍線部6の内容として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 領主には重い年貢を課す権利があり、他方で百姓に領主に対して申し立てをする権利があるという考え方のこと
イ 領主には百姓の平等を保障する義務があり、他方で百姓には領主の専制を防止する責任があるという考え方のこと
ウ 領主には百姓の生業維持を保障する責務があり、他方で百姓には仁君に年貢を納める責任があるという考え方のこと
エ 領主には百姓を武力弾圧する権利があり、他方で百姓は領主に対する紛争を起こす権利があるという考え方のこと

問十 傍線部7の語の用例として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 自分の行いを無理やり正統化する。
イ 相手が先に手を出したので正統防衛だ。
ウ 彼は先代の正統な後継者だ。
エ 欠席には正統な理由が必要だ。

問十一 傍線部8の理由として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

- ア 仁君である幕藩領主は、百姓の要求ならば何でも受け入れてくれるから
イ 百姓の生活が苦しければ、領主が支配の根拠となる仁政を行っているとはいえないから
ウ 生活が成り立たなくなるほどの過重な年貢は、百姓の死活問題になるから
エ 幕藩領主の支配の根拠は、百姓の訴願や武力行使の権利を容認する点にあったから

問十二 本文の内容と合うものを次の中から二つ選び、記号を記せ。

- ア 豊臣秀吉が行った刀狩りと「喧嘩停止令」は江戸時代にも引き継がれ、百姓が武器を所持することは固く禁じられた。
イ 強訴の際に鉄砲が持ち出されることもあったが、武器としてはなく合図の鳴り物として使用された。
ウ 日本の農村部で男性が成人とともに刀を所有する慣習は、近世に入ってから行われるようになった。
エ 近世の日本では幕府・藩の武士身分が暴力の正当性を独占しており、暴力の集権化が行われていた。
オ 年貢・夫役の軽減などを村役人が領主に文書で申し立てる訴願は、徒党・強訴・逃散と同様に非合法の行為であった。

【三】 傍線部1・2・3・4・5にあたる漢字を含むものを下のア～エから選び、記号を記せ。

一 週刊誌の暴口記事を読んだ。

- ア リロ整然と反論する。
イ ゴロ合わせを楽しむ。
ウ ワイロを政治家が官僚におくった。
エ 彼の愛情のハツロと考えられる。

二 古代ローマではカン容性が発揮された。

- ア あの人のカンゲンにだまされた。
イ カンゼンな正解をつくり出した。
ウ 病がカンカイした。
エ 親にカンドウされた。

三 入内して天皇のチヨウ愛を受けた。

- ア チヨウメイな光景を写真にとった。
イ 勸善チヨウアクの物語は面白くない。
ウ 重量が規定をチヨウカしてしまった。
エ 神のオンチヨウについて論じる。

四 叔母が危トクに陥った。

- ア ヒトクされるべき事実が公表された。
イ ふとしたことで奥義をカントクした。
ウ あの人にはトクノウ家としてたえられるべきだろう。
エ 西欧中世では、それは神へのポウトクの行為だった。

五 生ハン可な知識は危ない。

- ア ポウハン設備がととのっていない。
イ 規約にイハンした行いをとがめた。
ウ シハンのもので間に合わせてよい。
エ 学業ハントにして病を得た。

国語

一般選抜（3月8日実施分）

〔一〕 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

現存するレオナルドの素描やスケッチ類は、断片的なものを含めると約九〇〇点にのぼる。生前の彼はそれを上回る数の素描をも²のしたはずであり、さらには二万頁に達する手稿類を残したと推測されている。それらの手稿類におびただしい数のスケッチや図が描き込まれており、それらを素描に準ずるものと考え、西洋美術史上、レオナルドほど多くの素描を残した画家はほかに例がない。言い換えればこれほど大量の紙を使用した芸術家はいなかった。レオナルドは「絵画論」の中で「絵画は学（科学＝science）である」と言うが、むしろここで「絵画」を「素描」と言い換えてもよかつただろう。そしてレオナルドは、絵画が最も優れた芸術であり学であると言う。これも言い換えれば、絵画はあらゆるものを再現・表現できる理想的な手段だということである。たしかにレオナルドは絵画、それも素描によってあらゆることを表現しえている。A あえて完成されたタブローにする必要はないほどに、彼は素描によってすべてを語ることができたのである。素描の段階ですべてが完結していると言ってもよい。

彼の素描はあまりにうまさすぎる。それらはしばしば習作としてではなく、見せるための素描になっている。タブローとは関係のない、素描それ自体を見せるための素描である。そしてレオナルドは素描のための技法や画材の開発にも熱中した。そもそも彼がミラノ宮廷入りを³ネラ³っていた際にも、タブローではなく、素描をプレゼンテーションに用いていた事実は、単にタブローを制作した実績がないとか、タブローを持参するわけにはいかないと⁴いった事情によるものではなく、レオナルドがBに素描家だったという実態をよく示している。

ここにさらに、レオナルドの素描がほとんど細密描写ともいふべき小さな画像である点に注意すべきである。《最後の晩餐》のような大画面のための習作素描でさえもそうである。当時は紙も高価なもので、紙面を節約して大切に使う必要があつたのだから、それにしても細部まで入念に描き込まれた素描は、まるでそれ自体が一枚の独立したミニアチュール^{注3}のようである。

C レオナルドの時代、一般の認識では素描はまだ下絵でしかなかった。美術品としての絵画を求める注文主やパトロンの間で、レオナルドは下絵やスケッチを描いてばかりで、いっそうに絵画制作に移ろうとしない風変わりな画家だという誤解が生じたのも無理はない。だがその一方で彼は、素描家・製図家としてたしかに多方面で活躍したのである。紙と筆記用具さえあれば、あらゆる芸術・科学の分野のイメージ・シミュレーションが可能である。（Ⅰ）

たとえ作品が実現されずとも、その神髄が素描などを通して後世の画家たちに継承されたところに、レオナルドという希有な画家のB意義がある。レオナルドの素描は、ラファエロがそれらを盛んに模写し、そこから多くを学んでいることから明らかのように、早くから画家たちの手本として注目されていた。それと並行して美術愛好家たちも彼の素描やスケッチに関心を示すようになる。それに実のところ彼の素描や種々の図は、すでに一五世紀からほかの画家によって描き写され、版画化されて普及しはじめていた。要するにレオナルドは、素描家・製図家として、完成された作品とは別の文脈で、彼の存命中から確たる定評を得ていたのである。

それにしても、やむことなく蓄積し増加する膨大な記録と素描は本人ですら手に負えなくなり、それらを整理・分類することもままならなかつたようである。レオナルドは科学的研究にしても絵画論にしても、いずれそれらを編纂して出版するつもりでいた。だが、そのためには膨大な手稿を読み返さなければならず、とてもその時間は彼にはなかつた。レオナルドは弟子メルツイにそう漏らしている。出版には繰り返し推敲や校正を行うなど、地味で忍耐強い作業が伴う。レオナルドにはそうした忍耐力が欠けていたのも確かである。（Ⅱ）

ひたすら知的好奇心の赴くままに前進し続けるレオナルドには、後ろを振り返る⁵ヨウウ⁵がなかつた。平均余命四〇歳未満であつた当時、レオナルド自身短い生涯でどれだけのことをなすことができるか、常に不安を抱いていたにちがいない。それに素描はレオナルドの孤独な性格に⁶適い⁶すぎている。しばしば素描は逃避の場にもなつていたはずである。素描シンドローム^{注4}でも言おうか。（Ⅲ）

「レオナルドよ、いったいお前はなにをなしたというのか」

晩年のレオナルドは自分の人生を振り返り、こうジュツカイ⁷している。単なる下描きだつた素描をレオナルドはタブローに劣らぬ芸術にまで高めたが、それは彼の場合、素描が自己完結することであり、もはやタブローが必要になるところでもあつた。職業画家として生計を立てるにはあまり好ましくない状況である。やがてミケランジェロの世代になると、素描それ自体が美術愛好家たちの間で盛んに収集されるようになるが、それでも素描は素描にすぎず、画家たちはあくまで最終的にはタブロー制作を目標とした。だが、レオナルドには素描で満足してしまうところがあつた。

彼は並外れた夢想家・空想家であつた。したがって目に見えないもの、あるいはいまだ形になっていないアイデアを視覚化する際に、素描は最適の手段だつた。今日でも、建築設計ソフト、3D画像ソフト、グラフィックソフト、画像編集ソフト等、すべての機能を兼ね備えたソフトウェアがあれば、どんなものでも視覚化できるにちがいないという期待を誰しもがもつことだろう。レオナルドにとってはまさに素描こそが最強のツールだつたわけである。

その彼が最も実現を望んだもの。それは空を飛ぶことである。ミケランジェロは飛翔する人物を描いたが、レオナルドは絵画

のなかで天使にすら空を飛ばせることはなかった。鳥の翼に似せたつくりものを背中にくっつけたような姿で人間が浮揚することなどありえないことを、レオナルドは物理学的な観点からよく知っていたからである。その意味で、ミケランジェロが絵画に求めたのが主観的な表現だったのに対し、レオナルドは表現ではなく、厳密な再現を求めた。彼の描く絵や素描は、ある意味でハードSFの世界なのである。

その代わり、彼は現実の空を飛ばうとした(図5-16)^{注5}。夢想家の彼も、その点ではリアリストだった。それは人生哲学や処世術に倣⁹って危なげなく階段を登ろうとする者という意味でのリアリストではなく、自然世界の本質を見極めるために現実を直視する者としてのリアリストである。そしてまた、夢を現実化しようとする者という意味でのリアリストである。たしかに、結局のところ実現できたものはわずかで、ただ実現のための構想が膨大な素描として残された。しかし、彼自身は実現を確信して研究し続けた。D それ以上に空想や想像は膨らみ続けていったのである。

レオナルドは、孤独な幼少期から孤独な死を迎えるまで、永遠に夢想し、問い、素描し続けて、創造力と想像力のユートピアに生きたのであった。

(片桐頼継『レオナルド・ダ・ヴィンチ 伝説と実像』による)

注1 レオナルド……レオナルド・ダ・ヴィンチ(一四五二―一五一九)。イタリア、ルネサンス期の芸術家。

注2 タブロー……仕上げられた絵画作品。

注3 ミニアチュール……細密画。細かな描写で精密に対象を描いた画。

注4 シンドローム……症候群。多彩な症候で形成される。一まとまりの病態。転じて、「病的傾向」を意味して使われる。

注5 図5-16……レオナルドの「飛行機械のスケッチ」が本文に図として付されているが、ここでは省いた。

問一 傍線部1・4・6・9・10の読みを記し、3・5・7を漢字に改めよ。

問二 傍線部2の意味として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア ひとりじめした イ 手に入れた ウ 描いた エ 認めた

問三 空白部A・C・Dに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア だが イ しかも ウ そして

問四 空白部Bに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 主観的 イ 結果的 ウ 写実的 エ 本質的

問五 次の文が入る適当な箇所を(Ⅰ)～(Ⅲ)から選び、番号を記せ。

おそらくレオナルドほど紙という新素材と素描の利点を理解し、それを活用した画家は当時ほかにいなかっただろう。

問六 傍線部8はどういうことか。次の中から適当なものを選び、記号を記せ。

- ア 素描を描き始めるとそれが完成しないうちからでも、タブローが完成したことになる。
- イ 素描という売りものになりにくい作品の制作に終始し、自己満足の状態になる。
- ウ 素描が自然とタブロー制作に結びつくことを信じており、タブロー制作に着手しない。
- エ 一般の画家が到達すべきタブローの完成を目ざすことなく、素描の段階で制作が終わる。

【二】 次の文章を読み、後の問いに答えよ。

『万葉集』は四五一六番という番号が附された大伴家持の歌で終わるが、その少し前、四五一三番の歌は次のように文字化されている。

伊蘇可気乃 美由流伊気美豆 氏流麻湍尔 左家流安之婢乃 知良麻久乎思母

右の漢字列は「イソカゲノ ミユルイケミツ テルマデニ サケルアシビノ チラマクラシモ」という日本語を文字化したものと考えられている。今ここでは各句の間に空白を入れて示した。「考えられている」と表現したが、この場合はそうである可能性は一〇〇パーセントにちかいついてよいだろう。それは、短歌と思われる歌が、三十一の漢字によって文字化されているからで、一つ一つの漢字がいかなる発音をあらわしているかがわかれば、まずは「ヨメ」たことになる。漢字列を右のように片仮名に移し換えたかたちが「ヨメ」たかたちということになる。片仮名に移し換えたかたちを、日本語の語形や語義をふまえながら、「磯影の見ゆる池水照るまでに咲けるあしびの散らまく惜しも」(磯影が映って見える池水が、照り輝くほど咲いている馬酔木が散るのは惜しい)というようになかたちでできれば、「ヨメ」て「よめ」たことになる。

中国では伝統的に、漢字が「形・音・義」の三要素を備えているとらえる。「形」は字形、「音」は発音、「義」は漢字字義(語義)である。いっぽう、右の例においては、漢字はAを捨てて「B」だけをあらわしている。このようにその漢字があらわしている語の義を離れて漢字を使うことを「漢字の表音用法」と呼ぶ。そしてこのように表音的に使われている漢字を伝統

的には「万葉仮名」と呼んできた。

C のように D を使う、その使い方が『万葉集』にみられるということに由来するネーミングであろうが、E を F と呼ぶことは誤解をまねきやすいともいえるだろう。「万葉仮名」の「仮名」は文字の呼び名ではなく、仮名のように G している、という G の呼び名と考えればよいだろう。

右でわかるように、漢字を表音的に使って日本語を文字化した場合、漢字があらわれているであろう日本語の B がわかれば、漢字列は「ヨメ」る。したがって、「ヨメ」ることを最優先すれば、漢字を表音的に使う文字化は「ヨミ」にもっともちかい文字化ということになる。しかし漢字があらわれているであろう日本語の音がうまくつかめないと、まったく「ヨメ」ない。すでに「A」は捨てているので、漢字列をいくらながめていても、歌の意味⇨歌意はまったくわからない。つまり歌意から見当をつけることはできない。『万葉集』中には「ヨメ」ていない歌が幾つかあるが、それは H に置き換えが I ということだ。「ヨメ」ない歌は基本的に「よめ」ない。

巻一に収められている九番歌「莫囀円隣之大相七兄爪謁気吾瀬子之射立為兼五可新何本」は「吾」以下は「わが背子が立たせりけむ敵糧が本（⇨わが君がそばに立たれたという神聖な糧の木のもとよ）」とよめているが、「莫囀円隣之大相七兄爪謁気」の部分が「ヨメ」ておらず、難読歌として知られている。仙覚（二〇三）が「夕月の仰ぎて問ひし」とよんで以来、六十以上の「ヨミ・よみ」が考案されてきているという指摘があるが、現在に至るまで定説をみていない。五句のうちの一句だけがよめていない、という歌は他にもある。

しかしまた、「よめ」るけれども、「ヨメ」ないということもある。先に示した^{注1}「春楊葛山發雲立座妹念」はおそらく「ヨメ」ている。しかし、仮に少し「ヨミ」が違っていたとしても「よみ」は動かないだろう。つまり歌意はわかっているということだ。

中国語を文字化するにあたっての漢字が表語文字として機能していることからすれば、漢字を使う以上、漢字の表語機能・表意機能を捨ててしまうのは「本筋」ではない。したがって、漢字を表音的に使って日本語を文字化するやりかたは、いかに「ヨミ」やすいといっても、やはりそれは漢字を使うということからすれば特殊な使い方であるところであっておく必要がある。実際に『万葉集』全体をみれば、漢字を表語的・表意的に使っていることが圧倒的に多い。

巻第十一に収められ、「柿本朝臣麻呂之歌集」に出ていることが左注に述べられている二四一九番歌は「天地 言名絶 有汝吾 相事止」と漢字十一字によって文字化されている。この歌は現在「アメツチトイフナノタエテアラバコソイマシモアレモ」フコトヤマメ」とヨマレ、「天地」といふ名の絶えてあらばこそ汝も我も逢ふこと止まめ⇨天神地神の名が絶えることになった時こそ、あなたも私も逢うことが終わるだろう」とよまれることがある。この「ヨミ」に従うならば、傍線を施した部分が J ことになる。漢字列を「ヨム」という「方向」からいうならば、傍線を施した部分を K ということだ。『万葉集』の研究においては「読み添え」と呼ばれている。右では「ト」/「テ」/「バ」/「コソ」/「モ」といった L 、 M のある語の活用 N が文字化されていない。

中国語と日本語とはかなり異なるタイプの言語であるので、日本語にはあるが中国語にはない、という語がある。助詞・助詞はそうした代表とといってよい。これらは中国語にはないのだから、漢字を表語的・表意的に使おうとすると文字化できない。先にあげた「春楊葛山發雲立座妹念」(二四五三番歌)も「柿本朝臣麻呂之歌集」に出ている歌であった。

巻十に収められている三三三三番歌も「柿本朝臣麻呂歌集」に出ていると注記されている歌であるが、「吾背子乎 旦今々々 出見者 沫雪零有 庭毛保籽呂尔」と文字化されている。現在この歌は「ワガセコライイカイマカトイデミレバアウユキフレリニハモホドロニ」とヨマレ、「我が背子を今か今かと出で見れば沫雪降り庭もほろろ」とよまれている。この歌の文字化に際しては、漢字を表音的に使って助詞を文字化している。助詞や助動詞は実体的な語義をもたないといってもよい。語義をもたない語は表語・表意文字である漢字によって表意的に文字化することはできない。文字化しなくても、前後に置かれていると思われる語から、そこにある、であろう、助詞・助動詞がわかることもある。

例えば「家来而 吾屋乎見者 玉床之 外向来 妹木枕」(巻第二・二一六番歌)は現在「家」に来てわが屋を見れば玉床の外に向きけり妹が木枕とよまれている。「イエニキテ」ホカニムキケリ」の助詞「ニ」は文字化されていない。しかし、「家」に続いて「来」、「外」に続いて「向來」が置かれているところから、「イエニクル」ホカニムク」という表現構成であることが推測しやすい。いふならば、O ことになる。

しかし漢字列から確実に日本語にもとずくためには、助詞・助動詞などを文字化しておいたほうがよい。「ほうがよい」と表現すると文字化していいのは「よくない」ということになってしまうが、そうではなくて、文字化しておけば確実にヨメるといふことだ。先に述べたように、定型の和歌の場合、定型であることがいわば「生命」であるので、定型に収まるかたちの日本語にもとせることには一定の意義がある。

それでは、いわゆる「散文」の場合はどうであろうか。一つの日本語にもとせなくても、言いたいことがわかればよい、という「みかた」もありそうだ。そもそも文字化に漢字を使った瞬間に日本語は中国語側にひっぱられ始める。

江戸時代に本居宣長(二七三〇～一八〇一)という国学者がいた。三十年以上を費やして、『古事記』を読み解き、『古事記伝』としてまとめた。『古事記』にも歌謡は含まれているが、ほとんどの箇所が「散文」といってよいので、その漢字によって文字化されている「散文」である『古事記』を宣長がヨミ、よんだことはとてもない営為であったことになる。宣長といえば、「漢」の排除を主張したと考えられているが、それは中国嫌いなどということではさらさらなく、ひろくは規範的な思考方法を含む「理屈」

に、『古事記』を読み解くということに関していえば、漢字・中国語という強い「磁場」に、引き寄せられずに日本語のすがたところをとらえるための主張であったと推測する。

『万葉集』に話を戻そう。巻第八に収められている一六二番歌は「吾屋戸乃 秋之芽子開夕影尔 今毛見師香 妹之光儀乎」と文字化されていて、現在のこの歌は「ワガヤドノアキノハギサクユフカゲニイマモミテシカイモガスタヨ」とヨマレ、「我がやどの秋の花咲く夕影に今も見てしか妹が姿を」とよまれている。「開は終止形「サク」を文字化しているので、特に活用 **N** を文字化していないと思われる。そう考えると、文字化されていないのは「ミテシカ」の「テ」だけということになる。いわゆる **P** は漢字を表音的に使って文字化し、いわゆる **Q** は漢字を表音的に使って文字化するという、右の文字化のしかたは、漢字を表音的に使って文字化しているところを仮名に置き換えれば、現代日本語の文字化のしかたと同じ文字化のしかたであることになる。そう考えると、九世紀末頃にうみだされた仮名は、表音的に使っていた漢字のかわりになったことになる。

『万葉集』において、日本語の文字化の基本的なかたちは出揃っていた。

(今野真『日本語と漢字―正書法がないことは歴史』による)

注1 先に示した……「春楊葛山發雲立座妹恋」について、現在「春柳葛城山に立つ雲の立ちても居ても妹をしそ思ふ(＝葛城山に立つ雲のように、立ってもすわってもあの娘のことを思うのだ)」とよまれていることが示され、「立座」が「たちてもい」でも「と推測されている」とに言及されている。

注2 表語文字……中国語を文字化するための漢字は、一字で一つの語をあらわす「表語文字」であることを原則とする。日本語においても漢字一字が一語をあらわす場合はあるが、多くの場合は、そうではないので、意味を喚起しているが、一語を限定的にあらわしていないという意味合いで、「表意文字」ととらえる。

問一 傍線部1の内容として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 漢字列に対する日本語の発音は分からないが、内容は理解している。

イ 漢字列に対する日本語の発音は分かるものの、内容は理解できていない。

ウ 漢字列に対する日本語の発音と内容の、どちらも理解している。

エ 漢字列に対する日本語の発音と内容の、いずれも理解できていない。

問二 空白部A・Bに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 形 イ 音 ウ 義

問三 空白部C・D・E・Fに入る語の順序として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 仮名―漢字―仮名―漢字

イ 漢字―仮名―漢字―仮名

ウ 仮名―漢字―漢字―仮名

エ 漢字―仮名―仮名―漢字

問四 空白部Gに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 誤解 イ 機能 ウ 呼称 エ 検討

問五 空白部H・Iに入る語の順序として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 音―できる

イ 音―できない

ウ 義―できる

エ 義―できない

問六 空白部J・Kに入る語句の順序として適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 文字化されている―補ってヨんだ イ 文字化されている―補ってヨんでいない

ウ 文字化されていない―補ってヨんだ エ 文字化されていない―補ってヨんでいない

問七 空白部L・M・Nに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 体言 イ 語尾 ウ 助詞 エ 副詞 オ 活用

問八 空白部Oに入る適当なものを次の中から選び、記号を記せ。

ア その推測しやすい表現構成に支えられて、助詞「二」を文字化することが可能だった

イ その推測しやすい表現構成に支えられて、助詞「二」を文字化しないことが可能だった

ウ その推測しにくい表現構成に支えられて、助詞「二」を文字化することが可能だった

エ その推測しにくい表現構成に支えられて、助詞「二」を文字化しないことが可能だった

問九 空白部P・Qに入る適当な語を次の中から選び、記号を記せ。

ア 日本語 イ 中国語 ウ 付属語 エ 自立語

問十 本文の内容と合うものを次の中から選び、記号を記せ。

ア 「伊蘇可氣乃美由流伊氣美豆氏流麻涅尔左家流安之婢乃知良麻久乎思母」は、日本語への文字化ができていると考えられるが、それはこの漢字列に使用されている文字の数とは関係がない。

イ 漢字列「吾瀬子之射立為兼五可新何本」と「莫囂円隣之大相七兄爪謁氣」のよみは、どちらにも定説がある。

ウ 『万葉集』では漢字を表音的に使うことは、表語的・表意的に使うことよりも圧倒的に多い。

エ 「吾屋戸乃秋之芽子開夕影尔今毛見師香味之光儀乎」について、漢字を表音的に使って文字化しているところを仮名に置き換えると、現代日本語の文字化のしかたと共通することがわかる。

【三】 傍線部1・2・3・4・5にあたる漢字を含むものを下のア～エから選び、記号を記せ。

一 ナヤましい選択だった。¹

ア スノウ明晰な人だった。
イ ノウリヨクが開花した。
ウ ボンノウにとらわれた。
エ ノウミツな時間だった。

二 ウスイ味付けを好む。²

ア ハクボの時間の帰宅。
イ ハクシユ喝采の演奏。
ウ ハ克蘭強記の人物。
エ 有名なガハクの絵画。

三 ビヤク檀の香りがする。³

ア キンバクした状況になる。
イ 屏風にキンバクを用いる。
ウ 漁港に船がテイハクする。
エ ハクジツのもとにさらす。

四 トン屋から品物を仕入れる。⁴

ア 前代ミモン¹の出来事だ。
イ 患者へのモンシン²をする。
ウ 弟子がハモン³される。
エ ガラスにシモン⁴がつく。

五 疲れた仲間を鼓舞する。⁵

ア 偉人がマイソウ¹されている。
イ タイマイをはたいて手に入れる。
ウ マイド²ありがとうございます。
エ 花びらが窓からマイコム³。